



説教要旨 「認め合う歩み」

ルカによる福音書9章46～50節



弟子たちの間で、自分たちのうち誰が一番偉いか、という少年子供じみた言い争いが起りました。イエス様はそこで、一人の子どもの手を取り、そばに立たせ、『わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである…』(48節)と言われたのです。一人の子どもを受け入れることが、イエス様を、そしてイエス様をこの地上に遣わされた神様を受け入れること同義だと言われるのです。一見、「誰が一番偉いか」という弟子たちの議論とは関係がない言葉にも思えます。しかしここにこそ、弟子たちの言い争いの本質があります。自分たちの内で誰が一番偉いかという議論は、その共同体の中に序列をつけ、誰かを重んじ、その一方で必ずほかの誰かを軽んじることにつながります。イエス様は、軽んじられている子どもを受け入れることを求めることによって、この言い争いの背後にある私たちの心の根本的な問題に気づかせようとしておられるのです。

本来であれば、私たちは、無価値な、受け入れるに足りない者として、神様に軽んじられ、捨てられても当然の者なのです。しかし神様は、そのような私たちが愛して下さり、私たちの罪を赦し、ご自分の子として下さるために独り子のイエス様を遣わして下さり、その十字架の死と復活によって私たちを受け入れて下さったのです。その神の愛を受け、イエス様に従っていくのがキリスト者です。そのキリスト者の歩みは、イエス様の名のために、小さな、軽んじられ、軽蔑されている人を受け入れ、仲間として共に歩み、大切にするという歩みであるはずなのです。「主イエスの名によって」…イエス様の十字架の前に立つならば、わたしたちは誰かを裁いたり、排除したりできるはずがないのです。それは、わたしたちが与っている神さまの赦しを、神様の憐みを、真っ向から否定する行為だからです。

イエス様によって救われた者同士、イエス様に従う者同士、問題を抱えながらも互いに覚えて祈り、支え合っていくこと。そこにイエス様が指し示してくださっている道があるのではないのでしょうか。



(2019・3・3 説教者：稲垣真実)